

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 平石典子

平石典子氏の「「西洋」を読み替えて—煩悶青年と女学生の明治文学」は、明治二十年年代以降の若い高学歴の人々の精神と風俗が、ヨーロッパ文学を媒介とする「西洋」の強い影響のもと、「煩悶青年」と「女学生」という姿に典型としてあらわれたことを、文学作品とこれに隣接するジャーナリズムのテキストのなかに辿り、明治文学をめぐる一つの文学史的展望を示した論文である。参照される文献の言語は、日本語の他に、英語、フランス語、ドイツ語、イタリア語に及ぶが、「煩悶青年」と「女学生」の成立過程を、ヨーロッパ文学の様々な作品との対照と、原典とのずれを含む翻訳受容の場において描き出した手続きは、明治期の文学をより広い視野のもとに収めることを可能にした。とくに、イタリアの作家ガブリエーレ・ダンヌンツィオの作品が明治期の文学に対して持った意味を改めて検証したこと、ヨーロッパ文学の影響を「読み替え」として具体的に記述した点は、比較文学研究への貢献として評価できる。

本論文は、第一章「明治の「煩悶青年」たち」、第二章「Étudiante の憂鬱」、第三章「「墮落女学生」から「宿命の女」へ」、第四章「「新しい男」の探求——ダンヌンツィオを目指して」、第五章「女たちの物語」と、序章及び終章からなる。以下、論文の構成に従って概略を記す。

第一章では、「煩悶青年」が時代の注目を集めるにいたった経緯を、明治三十六年の藤村操の自死事件から説き起こし、これと前後するいくつかの小説作品のなかの煩悶する青年たちの姿、そしてイプセンの戯曲として日本で最初に上演された『ヨーン・ガブリエル・ボルクマン』の作品解釈をめぐる大きなねじれに着目して描く。

第二章では、明治二十年頃から「女学生」の風俗と世態をめぐる性的関心を核とする言説が、新聞ジャーナリズムを中心に「女学生神話」として成立し、機能していったことを確認した上で、『女学雑誌』の評論や、三宅花圃『藪の鶯』及び小杉天外『魔風恋風』等の小説に言及しつつ、その社会的広がりを論じる。

第一章と第二章は、それぞれ「煩悶青年」と「女学生」という用語自体の吟味を行いつつ、明治期における「ロマンティック・ラブ・イデオロギー」の影響力を改めて確認する叙述になっている。

第三章は、「女学生」が「墮落女学生」として悪女に傾斜し、さらには「宿命の女」の様相を帯びてゆくさまを、小栗風葉『青春』、夏目漱石『虞美人草』、上田敏『みをつくし』、北原白秋『邪宗門』等の作品を中心に、数多くの文学作品を引用しながら、時代的な背景をもあわせて記述する。

第四章は、森田草平と平塚明子によるいわゆる「塩原事件」と、事件に取材した草平自

身による小説『煤煙』にみられる新しい青年の類型を、上の世代に属する漱石の『三四郎』、森鷗外の『青年』との対照のなかに描く一方、ダンヌンツィオと高村光太郎によって描かれる日本人の姿、とくにその醜さの文学的表現が検討される。

第五章では、大塚楠緒子、田村俊子、及び『青鞥』に拠った女性作家の作品を中心に、明治期末の文学において、「女学生」の末裔たる女性たちがどのように描かれたかを具体的に辿る。そこには結婚制度との葛藤と、性をめぐる女性の側の様々な反応が、同性愛的世界を視野に入れつつ論じられる。

以上五章を通じて、言及される作品は歴大な数に及ぶが、特筆すべきは、十九世紀及び二十世紀初頭にかけてのヨーロッパの芸術作品が、図像とともに丹念に紹介されていることである。明治期の文学の叙述が、ヨーロッパ文学との関連のなかで、豊かな文脈を獲得し得ていると言える。

以上のように要約される本論文に対して、審査委員からは、第四章後半の、ダンヌンツィオによる醜い日本人の描写を論じた箇所は、論文全体の叙述の流れから外れることにならないのか、第三章における白秋の引用において、詩作品そのものの読みが示されていないのでないか、といった指摘があった。また、叙述に相前後する部分があること、言及される個々の作品について先行研究へのさらなる目配りが必要であること、引用、書誌等に改善すべき点があること、一部に用字の不統一が見られることなども指摘されたが、これらはいずれも本論文が持つ本質的な学問的価値を損なうものではないことが確認された。

よって本審査委員会は、平石典子氏の学位請求論文が、博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものであると認定することに、全員一致で合意した。